



今江・自然との調和を考えて

崩壊が起こる。全然放ってあった雑木林の山は、ほとんど崩れない。こういうのもやっぱり、調和を越えたところまで開発が進んだからだと思えます。それから、海もいろいろと問題があります。ただ、これは動物の先生から話を聞いたんですが、全国で熊本だけが底びき機械でとるのを禁止しているそうです。帆かけ船で底びき網を引っぱるといふ風物が残っているのは、日本で熊本だけだ。えらくいいことだとほめられましたけれども。帆かけ船だから、底のものがいっぺんにたくさんとれないという欠点があるかわりに、いつまでも資源がなくなるらない。細く、長くとれるわけです。もっとも、それが長崎県とのトラブルの原因になるということ、このまえ聞きましたけれども。何かああいう形の自然の利用方法が、いま一番大切になっているんじゃないかと思えますね。

●汚れていく「母なる川」

荒木 川というのは、母なる川と言われるように、非常に神聖なものであり、そこに親しみ、その川によって生きていくというのがこれまでの姿だったと思うんです。熊本だって、私たちの少年時代は、白川で水泳したり、小魚をとったりして育ってきた。実に夢多く、逞しく成長してきた。それがいまはもう無縁のものというか、むしろ有害なものに変わってしまった。人間の成長の過程を完全に覚えてしまった。水といえど水害のことも考えない。あるいは水道の水しか使えないということになっている。川によって生きてきたのに、その川は、いわばゴミ捨て場になっている。何かもう、人間自身の恥さらしのような気がしますね。ただ、最近、川を大事にする運動が、あちこちで行なわれるようになって、いくらかでもよくなりつつあるというのには認めます。例えば、熊本市内では、坪井川が市の努力で少しはよくなりました。白川も川沿いがかなり整備されつつある。ただ、川の美観をブチこわしている白川沿岸の不法建築については、行政の力の弱さというか、そういうものを感じます。

●思い切った対策を

加藤清正が白川の治水をする場合は、住民のことを考えて、思い切った措置をとったと思うんです。ところが、今日の国・県のやり方は、政治のうえて部分的に何とかしているという感じがします。根本的な、例えば、川の流れを変えて何か工夫するというようなことはしないのか。加藤清正でさえ、あれだけ川の流れを変えたりしているのですから、何かもう少し大きな手は打てないのかという気がします。簡単にダムでも造ってというふうな点が、何かもの足りないんですよ。

●目に見えないもの

藤坂 私が考えておりますことは、皆さんがおっしゃったことと重複するところがあると思うんですけれども、自然環境とか生活環境の中で、目に見える部分では、人間の努力によって比較的きれいにできると思うんです。だけど、目に見えない自然環境の汚染が、いま大変なスピードで進んでいる。例えば、土壌だとか水質だとか、そういうものが人間の生存を許さないような時代がくるんじゃない

かといわれていますが、そういう目に見えないもので、私たちが愛し、いやししていくという姿勢をとるに加えないといけないんじゃないかと思っています。

黒田 おっしゃるとおりです。私どもの運動は、いささか目に見えるものにとられていた感じがあります。私の自然保護論は、若干、心情的自然保護論でしてね。その点はもう少し理屈っぽい自然保護論の助けを借りなきゃいかんと考えておりますけれども(笑)。

熊本はよそに比べると、比較的汚染が進んでいない。地域的に非常に極端なところが若干ありますけれども、大体においていわれる先進地方よりも、幸か不幸かいい、それであら、これからは空とか水とか、目に見えないものにも注意していかなくちゃいかんと思えますね。

藤坂 イギリスのある詩人が、もし、詩人を育てる詩人学校といったものを創るなら、子供の頃は田舎で教育するといふようなことを言っています。人間が自然の中で学ぶことが如何に多いか、自然と人間が肌を触れ合せて生きることが、如何に大事かということ、これは何も詩人に限らず、全ての人に必要なことだと思えますね。

今の時代は、人間に本来に必要なことが軽視されすぎていような気がします。



藤坂・自然の中で学ぶことが...

●風が吹くと桶屋が...

今江 自然というのは、人間が考えるよりも、もっともつと複雑なものだと私は思うんです。ですから、よく「風が吹くと桶屋がもうかる」といいますが、ああいう感じの反応というのが自然の中には、たくさんございます。こちをついたために、全然違うところにとんでもないしつべ返しが出てくるようなものが。ですから自然のままのところをうんと広かったときには、人間が相当勝手なことをして、大体吸収されてきたわけですが、いまのように人間が強くなると、ちょっとしたこと、とんでもない形に増幅されて出てくるということじゃないかと思えます。これから先は、空気をよくすることに金がかかるという時代になっ

いままでのやり方を考えなおす

てくるんじゃないか。あるいは、いろんな計画も膨大なものになってくると言えますけれども、ただ、自然がそんなにデリケートに、複雑にからみあっているというのを考えていただくだけで、ずいぶん解決できる面がたくさんあると思うんです。ま、熊本の場合は、要するにあまり荒されずに残っている。ただ、そうは言っても、もう限度だと思えます。いままでと同じやり方から、早くUターンして、立派な環境をつくっていくということの本気になって考えないといかん時にきてるんじゃないかと。

刈込まないで伸ばしていいんじゃないかと考え、改めて見なおしてみます。例えば、江津湖の柳が植えてあるところは、上に電線も何もないのに、やつぱり毎年丸坊主にせん定してございます。あれは市の管理か県の管理か知りませんが、でも、どうせ湖畔ですから、なんぼ伸びてもいいと思うんです。柳の木がひっくり返ったからといって被害が出るわけではない。伸びた枝が邪魔になるところでもない。そういうところは切らなくていいんじゃないかと考える。それだけでも町の中の緑の量がふえるところがずいぶんあると思えます。

でと同じやり方でないものを考えるだけで、熊本が森の都に一步近づいたための具体的な方策が、ずいぶん出てくるんじゃないかと思えます。ま、そんなことを今度の緑化の關係で、県内をあちこち回りながら申しあげたところがいくつもありました。玄関のまわり、はいり込みのところは、刈り込んだ方がきれいですが、横とか裏には大きく伸ばした方が、もう当然いんじゃないかと思われるのに、やつぱり刈り込んである。そういう小さいところの思いつきみたいなものも、これから

●小さい思いつきでも

それから、熊本の町の中には、学校、官公庁がたくさんあります。どこも毎年相当の費用をかけて庭木のせん定をしておりますが、せん定をしないでどんどん伸ばした方がいい木もあります。例えば、裏の方に楠木などがあつたら、こゝはどんどん伸ばしていくことで緑の量が少しでもふえはしないか。何かそういう小さいところで、いまま

そうしますと、熊本の町の中で、緑をふやすというようなことが非常に重要になってくる。確かに、町の中に緑の大きな木が育つと、夏涼しいという目に見える効果もあります。それから、自動車の排気ガスその他の形で出てくる有害なガスを、木がどんどん吸着してひどすぎる時には木の葉が落ちるという形で処分してくれるという効果もございます。ホコリをたたなくするという効果もあります。その場合にも、大きな木をたくさん植えるという方法もありますし、いままでまるで習慣的に毎年刈り込んでいた木を

崩壊が起こる。全然放ってあった雑木林の山は、ほとんど崩れない。こういうのもやっぱり、調和を越えたところまで開発が進んだからだと思えます。それから、海もいろいろと問題があります。ただ、これは動物の先生から話を聞いたんですが、全国で熊本だけが底びき機械でとるのを禁止しているそうです。帆かけ船で底びき網を引っぱるといふ風物が残っているのは、日本で熊本だけだ。えらくいいことだとほめられましたけれども。帆かけ船だから、底のものがいっぺんにたくさんとれないという欠点があるかわりに、いつまでも資源がなくなるらない。細く、長くとれるわけです。もっとも、それが長崎県とのトラブルの原因になるということ、このまえ聞きましたけれども。何かああいう形の自然の利用方法が、いま一番大切になっているんじゃないかと思えますね。



▲団地にも大きな木の緑がほしい